

< 2019年7月 >

古賀 順子

「シャンティイ城」

今年も日本外国語専門学校パリ研修2週間が始まった。

パリの企業でインターンシップを行う学生さんとフランス語集中講座を受ける学生さんたちのサポートをしている。フランス、フランス人、フランス語、フランス文化に対する考えや興味は人それぞれで、若い彼らと過ごす2週間は私にとっても学ぶことが多い。

授業やインターンシップがない週末を利用して、「シャンティイ城」でのんびりと一日を過ごした。シャンティイはパリから北に30分程離れたオワーズ県にあり、「コンデ公美術館」の名前で知られる城である。14世紀から何度も領主が変わり、現在の建物は、最後の領主ドーマル公爵(1822-1897)が再建したものだ。ドーマル公は、1830年フランス王政復古から1848年2月革命までのフランス王ルイ・フィリップ1世の息子で、後継者を亡くし、蔵書や美術コレクションが散逸しないよう、城と所蔵品すべてをフランス学士院に寄贈した。そのおかげで、今日も1897年ドーマル公死去の時と変わらぬ姿で城が残っている。

14世紀から変遷してきた領地シャンティイは、1484年モンモランシー家が所有し、2代目アンヌ・ド・モンモランシー大法官(1492-1567)の手で立派な城を有する領地に発展する。彼の騎馬像が、今もお城前の広場を飾っている。フランス王家と財力、権力を争うモンモランシー家は、アンヌ・ド・モンモランシーの孫がフランス王に背いたという理由で、1632年トゥールーズで処刑される。領地はフランス王ルイ13世に没収されるが、1643年ルイ13世のお后でルイ14世の母アンヌ・ド・オートリッシュがモンモランシー家に返却。返却を受けたシャルロットは、処刑された領主の妹で、ブルボン・コンデ家に嫁ぎ、ここからシャンティイはコンデ家の領地に移る。

コンデ家のなかでも「大コンデ公」と呼ばれるブルボン・コンデ家のルイ2世(1621-1686)がシャンティイ領地の大改造を行う。庭師ル・ノートルにフランス式庭園を造らせ、マンサールが城の改築にあたる。1671年フランス王ルイ14世との和解を目的に開かれた晩餐会は今日まで語り継がれる祝宴。18世紀初頭には「厩舎」が建立され、今日も「馬の美術館」として馬の調教伝統を守っている。

フランス革命で破損した城や領地を現在の姿に戻したドーマル公は、軍人として、また美術品収集家として生涯を送る。17歳で父ルイ・フィリップ1世の軍隊に入り、アルジェリアに出陣し、凱旋。自らを「大コンデ公」と重ねることを好んでいた。1848年2月革命でロンドン近くに亡命し、シャンティイに戻るのは1871年のことだ。シャンティイを再建するとともに、美術品収集に財産を費やした。なかでも図書室に所蔵された書物は、価値が付けられない貴重なものだ。1412年から1489年に描かれた「ベリー公爵の彩色豊かな時祈書」は世界一美しいミニアチュール(細密画)と評価されている。肖像画家ジャン・クルーエ(1480-1541)と息子フランソワ・クルーエ(1515-1572)の作品、ラファエロ「三美神」(1504-1505)「オルレアンの聖母」(1506-1507)もドーマル公コレクションの絶品である。ルイ14世が勝戦の褒美に「大コンデ公」に与えたとされる「ピンク・ダイヤモンド」もある。洋梨形の美しいピンク色のダイヤモンドで、痛風だった「大コンデ公」はこのダイヤモンドを杖の取っ手に飾っていたそうである。1926年嵐の夜、二人の泥棒に盗まれた「ピンク・ダイヤモンド」はリンゴの中に隠された形で発見され、無事シャンティイに戻された。以後、展示されているのは偽物である。

シャンティイ城を見ながら、木陰で学生さんたちと円陣を組んでサンドイッチの昼食。日差しは強かったが、木陰は涼しく、何世紀もの物語を体現している城を身近に感じる事ができた。